

国

語

(60分)

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、
左記の注意事項をよく読むこと。

注意事項

- 1、問題冊子は、20ページまであります。
- 2、解答用紙は問題冊子の中央にはさんでいます。解答はすべて、解答用紙に書き込みなさい。
- 3、始め、の合図でページ数を確認し、受験番号・名前を書きなさい。
- 4、問題の内容についての質問には、いっさい応じません。印刷のはっきりしないところがあれば、静かに手をあげなさい。
- 5、時間を知りたいときも、静かに手をあげなさい。
- 6、具合が悪くなったり、トイレに行きたいときは、手をあげて監督の先生の指示に従って行動しなさい。
- 7、問題冊子は、各自持ち帰ってよろしい。

① 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(なお字数制限のある問いは句読点や記号も一字に含みます)

アフリカ南西海岸、またの名を「骸骨海岸」は死の世界である。ベンゲラ寒流による大気の安定で降雨がほとんどなく、海岸1300kmにわたって赤いナミブ砂漠が広がっている。風と霧の支配する沿岸には、打ち上げられた鯨の骨や難破船が散乱する。

内陸を150kmほど行くと草と低木がまばらに見えてくる。サヴァンナが始まるのだ。その砂漠とサヴァンナとの境界に不思議な光景が広がっている。葉色、薄緑色の一面の草原あちこちに、赤茶けた*土が円状に露出している。直径は2mから20mほどと様々であるが、土の円環は見渡すかぎりに散らばっている。その様子はあたかも、無数に降り注いだ星屑のクレーターのようなだ。「妖精の環」というのが、このあたりで牧畜をいとなむヒンバ族の呼び名である。

*この奇妙な植生の謎の解明に20年以上心血を注いだ生物学者がいる。はるか彼方の北ドイツ、ハンブルク大学のノルベルト・ユルゲンス博士である。

ユルゲンスは毎年撮影した写真を比較して、妖精の環が年々少しずつ大きくなってゆくを見つけた。大きくなった円環が②ときどき消滅する一方、新しい小さな円環ができてくる。

③ 妖精の環はこの乾燥地の生態系の鍵だ、とユルゲンスは語る。円環のなかの土が赤茶けているのは、そこに多く含まれる水のためである。その水分のおかげで、年間雨量わずか100mmほどのこの乾燥地に多年草が生息しているのだ。いくつもの種からなる多年草は、露出部と接する円環の部分に特にたくさん、背丈が高いものが生えている。安定して存在する多年草は昆虫たちを、昆虫たちはトカゲやリス、そして鳥たちの生を支えている。妖精の環は目に楽しいだけでなく、この一帯の生態系に、一見貧弱な景観とは裏腹な意外な多様性を与えている、というのだ。

妖精の環はどうしてできたのか。ユルゲンスの答えは「スナシロアリ」であった。北から南まで1500km以上にわたる地点で1500以上の妖精の環の調査がおこなわれた。A すべてにおいてつねに見出された昆虫は、砂地に棲まうスナシロアリ「プサモテルメス・アロケルス」一種のみであった。

スナシロアリは円環中の露出土の地下に巣を張っていた。そして幾度も円環上の草の根を食いちぎる現行犯の姿で観測された。スナシロアリが食べ残した草の残骸、そして活動の跡を示す小さな盛り土を計測することで、彼らがB意図をもっているかのよう、円環を外へ外へとひろげていつている様子が浮かび上がる。円環のなかの裸の土に偶然生えた草は、すぐに綺麗に掃除されてしまう。いくつかの円環のなかではスナシロアリの軍団も観測された。襲われて数を減らし絶滅に瀕しながらも、スナシロアリは粛々と草の根をかじって、円環をひろげていく。

シロアリとアリは習性が少し類似していて、ともに複雑な社会を作る。真社会性の昆虫である。しかし系統からすると全く別の生物で、アリがハチの近縁種なのに対し、シロアリに近いのはゴキブリである。

一つのシロアリの巣には、全員の母である女王一匹に加えて、彼女の定まった夫である王が一匹いる。次世代を担う王女たち、王子たちを除けば、その他のシロアリは労働者または兵士である。アリとの大きな相違は「男女同権」と「より進んだカースト分化」である。王族だけでなく、労働者にも兵士にもメスとオス両方がいる。完全に不妊化されていて*つがうことはできず、働きぶりに男女の区別はない。シロアリは草食であるため、労働シロアリは鋭いあごをもたず、特別の攻撃用のおごをもつ兵シロアリとの差は歴然としている。

シロアリの人生はXに見える。労働シロアリはひたすらに植物のセルロースをかみ砕き、巣にもちかえる。女王と王は、巣の最奥の部屋を決して出ることなく、ひたすら卵を産み続ける。兵シロアリは別の兵シロアリに出会うと匂いを確かめ、余所者だと分かった途端攻撃を始める。仲間の兵がC駆付け加勢する。しかし余所者とは誰だろうか。

兵士たちが戦うのは、近隣に巣をもつ別の王国の兵士たちである。人の目には見えなくとも、一つの妖精の環の地下には、一つのスナシロアリの王国がある。王国どうし領土を巡って絶えず争い続けているのである。円環と円環の間の草地は、兵シロアリたちの国運をかけた戦場である。たくさんの兵士を抱えた大きな王国は、小さな王国を打ち負かして滅ぼしてしまうだろう。そして最後に残るのは、軍事力の拮抗した、どれも同じくらいの大ささの王国だけだろう。それこそが、類似した多くの妖精の環で草原が埋めつくされている理由なのだ。そう論ずるのはプリンストン大の数理生物学者、コリーナ・タルニータ博士である。彼女は生物界における*パターン形成研究の、若き第一人者である。

タルニータは妖精の環でいっぱいの草原の空撮写真から「*ヴォロノイ図」を作ってみた。隣り合った二つの円環の中心から、等距離の点を集めた直線を引く。それは二つの王国の国境線をおおよそ表している。円環二つのすべての組み合わせでこの直線を引き、つなぎ合わせるとヴォロノイ図が完成する。こうして描いたスナシロアリの諸王国の地図を見て、各王国がいくつの隣りの国に接しているかを、タルニータは数えあげた。その数の平均はおおよそ6であった。これは平面の「最密充填」、すなわちパチンコ玉を箱いっぱい一段詰めた配置と同じである。シロアリたちの血みどろの戦いの結果、草原の資源は最も効率的に、諸王国の間で分割されるのである。

女王から末端労働者まで、王から前線の兵士まで、全員が王国の維持拡張のため、私を滅して生きるシロアリたち。近未来の人間を待つ*デイストピア社会のようなくみが、彼ら自身の大きさの何十万倍というスケールで、妖精の環の草原の不可思議な景観を作り上げている。自ら意図も意識もしない*大義に捧げられたスナシロアリの灰色の人生。それはなんと哀しくなんと愛おしいのだろう。

南半球のナミビアの一月は夏である。40度を超える暑さ、湿気で重たい空気。湧き出す雲で暗くなった空。それは待ちに待った雨季の訪れである。大地にエネルギーを打ちつけてとどろく雷、数時間にわたる水がめを覆したような豪雨。突然に雨がおさまった青空に映える虹。

数日の雨が景色を一変させる。麦藁色は消えて草原が新緑で満たされる。ピンクや紫の野花が混じる。どこに隠れていたのか、黄色の花が大地の一角を埋め尽くす。爽やかな風が吹き渡り、熱帯の艶やかな花々が一斉に萌え出し、空気は強い香りではないになる。シマウマたちが、そして*エキゾチックな角の*オリックスたちが、妖精の環の草を食んでいる。それはまさに地上の楽園である。

初めてナミビアを訪れ、この夢のような光景に遭遇して、青年科学者ノルベルト・ユルゲンスは言葉を失った。目には涙がにじんだ。そして彼の人生は定まった。

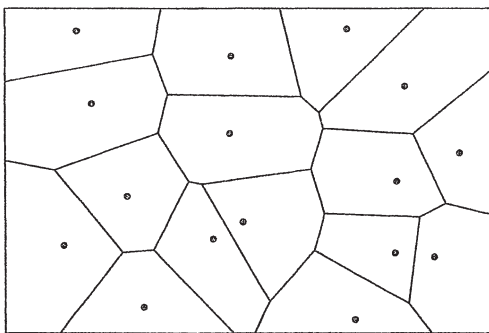
ナミビアの天国的な雨季は短い。すぐに始まる乾季に備えて、動物たちに休む間はない。そしてスナシロアリの巣にも嬉しい雰囲気を訪れる。新しい翅の生えた王女シロアリたち、王子シロアリたちの結婚飛行が始まるのである。^⑥ *隷属の哀しみ

も灰色のデイストピアもたんなる幻想^{げんぞう}だった。大空で二匹^{にひき}ずつ*つがいになったのち、草原のどこかに降り立ち、二人して新しい王国を始めるのだ。おぼつかない足取りながら華^{はな}やいで、彼女ら彼らが順次巢から出てくる。飛び立つてゆく王女たち、王子たち。こうして赤い砂漠に、新しい生命のサイクルが始まるのだ。

(全卓樹「赤い砂漠の妖精の環」『渡り鳥たちが語る科学夜話』より。問題作成の都合上、本文を改めた部分がある。)

(注)

- *土が円状に露出している……円の内側に草が生えておらず、土が広がっている様子。
- *この奇妙な植生……「妖精の輪」に見られる不思議な植物の分布。
- *真社会性の昆虫……ここでは、同じ種類で群れを作って生活している昆虫。
- *カースト分化……ここでは、昆虫が労働上の役割分担をすること。
- *不妊……妊娠^{にんしん}しないこと。
- *つがう……交尾する。
- *セルロース……ここでは食物繊維^{せんい}の一種。
- *拮抗……同じくらいの力で張り合うこと。
- *数理生物……数学と生物学にまたがる研究分野。
- *パターン形成……生物に見られる模様や形などのパターンが、どのように作られるのかを研究する学問。
- *ヴォロノイ図……下図参照。
- *デイストピア社会……反理想的社会。
- *大義……正しい理屈^{りくつ}。
- *エキゾティックな……ここでは、「魅力的な^{みりよく}」という意味。



ヴォロノイ図

*オリッククス……長い角を持つウシ科の動物。

*隸属……相手に従うこと。

*つがい……オスとメスのひと組。

問1 傍線部①「星屑のクレーター」とは何をたとえたものですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 砂漠とサヴァンナの境界に見られる、直径2mから20mほどの赤茶けた土の円環。

イ 砂漠とサヴァンナの境界に、藁色、薄緑色の草と低木が散らばっている植物の様子。

ウ 砂漠とサヴァンナの境界に、かつて無数に流星が降り注いでできた土のくぼみ。

エ 砂漠とサヴァンナの境界に散らばっている動物の骨が、無数に集まって生じた円状の化石群。

オ 砂漠とサヴァンナの境界に散らばっている、牧畜をいとむヒンバ族が作った妖精の輪。

問2 傍線部②「妖精の環が年々少しずつ大きくなってゆく」とありますが、その理由が書かれている部分を本文中から解答らんにか合うように三十字以内で探し、初めと終わりの五字を抜き出して答えなさい。

問3 傍線部③「妖精の環はこの乾燥地の生態系の鍵だ」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 内陸部にある「妖精の環」は砂漠と違って、草や低木などの植物が生息しているから。
- イ 砂漠とサヴァンナの境にできる「妖精の環」の中の土は、赤茶けた色をしているから。
- ウ 年々大きくなったり新たな環ができたりと、「妖精の環」は植物のように成長し続けるから。
- エ 「妖精の環」の下にある水が、植物から動物までの多くの生物の生を支えているから。
- オ 土しかない「妖精の環」の内側と違って、環の外側には多くの生物が生きているから。

問4 空らん部

A

C

 に当てはまる語句として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア まるで イ けっして ウ すぐに エ ぜび オ ほほ

問5 傍線部④『男女同権』と『より進んだカースト分化』とありますが、「労働シロアリ」と「兵シロアリ」についてどのようなことが言えますか。適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 労働シロアリも兵シロアリも、オスとメスといった性別はないということ。
- イ 労働シロアリも兵シロアリも、オスとメスに役割の差がないということ。
- ウ 労働シロアリも兵シロアリも、オスとメスの間に依存関係いぞんがあるということ。
- エ 労働シロアリと兵シロアリでは、それぞれの近縁種が全く異なるということ。
- オ 労働シロアリと兵シロアリでは、役割に応じて体の作りに差があるということ。
- カ 労働シロアリと兵シロアリでは、草食か肉食かの違いちががあるということ。

問6 空らん部 X に当てはまる語句として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 順調 イ 乱調 ウ 変調 エ 好調 オ 単調

問7 傍線部⑤「人生は定まった」とありますが、その具体的内容を説明した次の文の（ ）に当てはまる語句を、本文中から十字以内で抜き出して書きなさい。

- （ ）に人生をかけることにしたということ。

問8 傍線部⑥「隷属の哀しみも灰色のデイストピアもたんなる幻想だった」とありますが、なぜ筆者はこのように考えたのですか。八十字以内で説明しなさい。

問9 本文の内容として不適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「妖精の環」の内側の地下では、スナシロアリ以外の昆虫を見出すことはできない。
 イ 「妖精の環」の内側に偶然生えた草は、たちまちスナシロアリに食べられてしまう。
 ウ 「妖精の環」に棲むスナシロアリは、王以外が女王に子供を産ませることはない。
 エ 「妖精の環」の地下にあるスナシロアリの王国は、最終的にどれも同じくらいの大きさになる。
 オ 「妖精の環」が新たに作り始められるのは、スナシロアリの王女・王子が飛び立つ雨季である。

〔三〕 有人は中学二年生の時、アレルギー発作を起こした転校生の道下を助けようとし、失敗したことで引きこもりとなってしまった。心配した叔父は、自分の診療所がある北海道の離島へ有人を呼び寄せた。有人はその島の高校入学二か月後に初めて登校した。これを読んで、後の問いに答えなさい。(なお字数制限のある問いは句読点や記号も一字に含みます)

「じゃーな！ 有人また明日な！ * ハル先輩も！」

* 誠は自転車に乗って港のほうへと下って行った。陽気と元気をまとめて高校生男子の形にしたなら、誠になるだろうと有人は思った。

有人と叔父の家は、港とは反対方向である。診療所へ行くというハル先輩と帰途が一緒になってしまった。ハル先輩は寡黙だった。有人も黙っていた。そもそも有人は、* 海鳥観察舎の一件から、ハル先輩には苦手意識があった。寮にまで入って照尻高校へ進学した理由については若干の興味が芽生えたものの、尋ねるわけにはいかない。訊けば、同じ質問を返されても文句は言えないからだ。

道中ハル先輩が話したのは、一度きりだ。小中学校の真ん前にある、無意味な押しボタン式信号機のところであった。

「この信号、意味ないと思うよね」

心を見抜かれたみたいだった。有人の頭の中で警戒のアラームが鳴る。この神経質そうな人は想像以上に鋭いのかもしれないと身構え、返事が遅れた。微妙な空気が二人を包んだ。

そんな有人の不自然さを気にかける様子もなく、ハル先輩は続きを話した。

「でも、これがないと、島で生まれ育った子どもは、本物の信号を見ないまま島外へ出る。最悪、事故に遭うかもね」車両側の青シグナルを*一瞥して、ハル先輩は歩調を速めた。「意味があるから、あるんだ」

有人は目だけを動かしてハル先輩を見た。信号が存在する理由は明かされたが、先輩が言いたかったのは、それだけだろうか？

東京から来たことから、ハル先輩も有人について複雑な事情があると見込んでいるに違いない。そういう推測をもとに、な

にやら人生訓めいた言葉を、島生活の*先達としてかけてきたのでは——そんなたくらみを疑った。だが、数列みたいに整然としたハル先輩の横顔からは、なんの感情も読み取れなかった。これは拍子抜けだった。有人は他人の独り言を聞いてしまったような気分になった。

ハル先輩とは診療所の前で別れた。

「じゃあ、また明日。さよなら」

定型文みたいな挨拶に、有人は口先で「さよなら」と返した。そうしてすぐさま家に飛び込んだ。自分のテリトリーに戻る、急に疲労感が押し寄せてきて、有人は昼寝をしてしまった。

目覚めると、階下に叔父の気配を感じた。おそらく夕食を作っている。ああ、診療所はもう終わったのだと枕元の目覚まし時計を確認すると、午後六時を少し過ぎていた。

のそのそと起き出し、台所へ行くと、叔父が味噌汁の火を止めたところだった。食卓の真ん中には醤油で煮つけられたタコと大根が、大皿に盛られている。

「それ、野呂さんからいただいた」

ケンタッキーフライドチキンを差し入れてくれる島民がいればいいのにと、有人は思った。島に来てからというもの、海産物を口にする割合が圧倒的に多く、肉は減った。

「ごめん。寝てて手伝いに行けなかった」

「今日は疲れたか？」
「いただきますと手を合わせてすぐ、叔父が訊いた。」
③「でも、頑張ったな」

「……別に頑張っではないよ」

帰るチャンスがなかっただけだ。誠が四六時中そばにいて、あれこれと世話を焼かれ、付きまとわれ、ちよつとした言い争いもあつたけれどすぐに向こうから詫びてきて、果てはトイレまでついてこられたと話すと、叔父は笑った。

「誠は嬉しいんだよ。同性の同学年が初めてなんだ」

「……僕、本当は二年なんだけど」

「そんなことどうでもいいのさ。うん、この煮つけ、美味いな。隠し味は*タラ魚醬かな」

そんなこと、という五音を、有人はタコとともにかみしめる。そんなことなのか。とんでもないことじゃないのか。煮つけは、食べ慣れたものとはどこか違う複雑な味がする。

④ 全然。さ、午後も張り切って行こーか！

あの明朗さ。知らないうちに合わせてしまった歩調。疲れたのは確かだ。でも、もう学校に行きたくないという、東京で嫌というほど味わった気持ちはないのだった。逆に、もう一度疲れてみたいとなぜか思っている。

「診療所の手伝いだけど、これからは四時半過ぎだけでいいからな。今日はまあ、仕方ない」

「そういえば、*涼先輩が叔父さんのところに弟子が来ているって言ってた。柏木さんとかいう」

「柏木くんか？ 彼は弟子じゃないぞ。研究テーマに沿う他の医師のところにも話を聞きに行っている。俺はその中の一人っただけだよ」

「去年も来ていたって聞いたけど。ハル先輩が挨拶に行ったよね？」

「ああ。彼は柏木くんの研究に協力してくれたんだ」

研究に協力と言っても、人体実験的なあれじゃないぞと、叔父は冗談めかした。

「一種のインタビューだな。柏木くんの研究テーマに陽樹のデータが合っていたのさ」

*ウトウの帰巢を見に行った日、ハル先輩は倒れたのだった。薬も受け取っていたことがあるから、なにか持病があるのだろうが、あのあと札幌に帰って治療したとは聞いていないし、そもそも離島に進学している時点で、深刻な病気とは考えにくい。もしかしたら、*転地療法で離島に来ているのかもしれない。今どき転地療法なんて時代錯誤なイメージだが。

ともかくにも、柏木さんという人が離島にいる叔父を何度も訪ねて来ているのは、研究のためだけではなく、自分と同じく憧れもあるのかもしれない——有人は味噌汁を飲み終えて、空の茶碗と重ねた。叔父はまだ食べ終わっていなかった。有人は自分の食器を先にシンクに下げて、自室に戻った。

医学部卒業後、博士課程基礎医学コースに在籍中という柏木は、三十歳前後の男性一人を集めて平均化したような、当

り障りのない容貌だった。際立つて頭が良さそうにも見えない。彼は白衣を身に着けていなかった。ワイシャツとストラックスという普通のサラリーマンみたいで立ちで、叔父のそばに控えている。医師国家試験には受かっているだろうに、医師然としたなりを敢えてしないのは、叔父を立てているようにも、診療医としていないという主張のようにも見えた。午後の診療時間終了後、有人が待合室の片づけや観葉植物の葉をきれいにしている間、柏木は診療室や処置室で、使用した器具の消毒や廃棄、薬剤のチェックなどをしていた。

カタリとなにかが開く音に、いったんは離れた視線を再度送ると、柏木が鍵付きの棚に今日納品されたと思しき薬類をしまっているところだった。彼の手には、あの日以降忘れたくても忘れられない*エビペンが二本あった。有人は目を向けたことをものすごく後悔し、二度とそちらを見るまいと、心を固めた。

柏木がいる間、有人と叔父の夕食はいつも若干遅かった。通常の業務を終えた診療所で、叔父と柏木が話をするからだ。自分の研究のために、叔父の意見が必要なのだろう。

柏木は五日間島に滞在して、週末に北海道本島へと帰っていった。挨拶に毛が生えた程度の言葉は交わしたものの、特に膝を突き合わせて話し込むことのなかった有人は、彼個人に対して特別な感情も抱かなかった。帰る前日まで。

島を離れる前日、柏木は有人に言った。

「先生がここで医師を続けていることには、とても大きな意味があるんだ。だから、負担／家事／先生／ほしい／減らし／を／て／の／の。積極的にお手伝いをしてあげてください」

君は怠けていると言われたみたいで、柏木の印象は少し悪いほうへと傾いた。家事の分担なんて、島に誘った当の叔父からは一言もないのだ。有人は不承不承頷いた。

I 北海道本島から叔父を頼って三度もやってきた医学研究生の存在は、既に高かった島内での叔父の名声を、II 押上げた。
III 川嶋先生はすごい、すごいから遠路 IV 学生が教わりに来ると。

「先生がいるから、照羽尻にいても安心なんだわ。有人くんの叔父さんは神様みたいだよ」
甥というだけで、有人は叔父への称賛を嫌というほど聞かされた。

叔父自身は、誰になにを言われても変わらないうにいた。そんな様子は、乗務員が総出で感謝の意を表明してもひょうひょうとしていた、*かつての姿を思い起こさせた。

⑦ 柏木が帰っていった週末、叔父は傍らに難しそうな文献を開きながら、パソコンで診療所の待合室に貼るポスターを作っていた。そんな叔父に、有人は本音を口に出した。

「……土日くらい、休めばいいのに」

「俺は研修医のとき、救急救命室でも修業させてもらったんだが」叔父は顔を上げて微笑んだ。「いろんな患者さんに会えた。その*ERは、基本的に受人要請があったら断らないのがモットーで、どの患者さんが重篤なのか優先順位を見極めなければならなかった。早急の確な判断が必要だったよ。検査が必要なら、その検査機器の空き状況も考えて患者さんを診ていく。*CTで異常が見られなかったが、どうしても気になるから、今度は*造影剤を入れて*MRIを撮りたい、なんていうパターンも珍しくない。すると、もう帰りたいがる患者さんも出てくる。検査費用がかさむと言われたりね。でもそこで、帰ってしまったていいのか……」

叔父は当時を思い出すような遠い目をして、窓越しの青空に視線を移ろわせた。

「迷う時間も惜しいんだ。そんなとき、不勉強は致命傷になる」

耳が痛かった。有人は引きこもっていた時間も、学校に通い出した今も、特段勉強はしていない。しかしながら、今それを責める叔父でないことも承知していた。

「どんなに最善を尽くしても、患者さんやその家族に恨まれることはあり得る。臨床医はそういう仕事だ」叔父は椅子に座ったまま背を丸め、腰をさすった。「でも、そういうケースを限りなくゼロに近づける。そのための努力を止めてはいけない。」

⑧ ここはERと似ている。時間が勝負になる患者さんが、いつ担ぎ込まれてもおかしくない。日々勉強するのは、当然のことなんだよ」

恨まれることはあり得る。

有人の眼前に過去の映像が浮かんだ。倒れている道下だ。ドア越しの*和人の声もよみがえった。

——ちよつとだけ言語障害残ったみたいだな。

道下は絶対に普通の未来を奪った相手を恨んでいる。

こびりついて離れないと承知しつつも、有人は過去を払い飛ばすように頭を激しく振り、階段を駆け上がって自室に引込んだ。

あの日さえ過去から消えれば、僕と道下の未来も違っていたのに。

スマホを手取る。和人からLINEメッセージが来ていた。

『よう。そっちはどうだ？ 俺は正直毎日キツイ』

キツイとはあるが、ひょうきんなスタンプも押しであった。志望の大学に進学した上でのキツさを、やりがいに変えて楽しんでる、そんなニュアンスだ。

⑨ 先の見通しが明るいから、キツくても進んでいけるのだ。

有人はスマホを布団の上に投げて、爪をかんだ。

(乾ルカ『明日の僕に風が吹く』より。問題作成の都合上、本文を改めた部分がある。)

(注)

* ハル先輩……有人が通うことになった照羽尻高校二年生の男子生徒、八木陽樹。札幌から来た寮生。

* 誠……照羽尻高校一年生の男子生徒。地元漁師の息子。

* 海鳥観察舎の一件……入学後の五月に有人は海鳥観察舎で、軽はずみな発言をハル先輩にとがめられた出来事があった。

* 一瞥……ちらりと見ること。

* 先達……その方面に詳しくて、他を導く人。

* タラ魚醬……タラから作った発酵調味料。

* 涼先輩……照羽尻高校二年生の女子生徒。地元旅館の娘。

- *ウトウ……海鳥の一種。
- *転地療法……住み慣れた土地を離れて、環境かんきやうの異なる所に住み療養りやうようすること。
- *エピソード……アレルギーの発作が出た時に用いる救急医薬品。
- *かつての姿……叔父が飛行機内の急病人を救った姿に幼かった有人は憧れあこがを抱き、医師を目指すようになった。
- *ER……救急外来。
- *CT、造影剤、MRI……いずれも医療用検査機器いりやうきぎやその際に使用される薬剤。
- *和人……有人の兄。大学医学部に進学している。

問1 傍線部①「警戒のアラームが鳴る」とありますが、この時の有人の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア ハル先輩が照羽尻高校に進学した理由を知りたかったが、自分に対して同じ質問を返されても困ると思った。
- イ ハル先輩は自分のハル先輩に対する苦手意識に気づいたようなので、嫌きらわれてしまったのではないかと思った。
- ウ ハル先輩は自分が信号を気にかけていたことに気づいており、ハル先輩の鋭さには油断がならないかと思った。
- エ ハル先輩がここに信号のある理由を親切にも自分にだけ話した理由がわからず、不思議に思った。
- オ ハル先輩は無表情のまま信号の話をするので、自分に本心を隠しているのではないかと疑わしく思った。

問2 傍線部②「それだけだろうか？」とありますが、ハル先輩はほかにどのようなことを言いたかったのだと有人は考えていますか。それを説明した次の文の（ ）に当てはまる内容を、三十字以内で答えなさい。

ハル先輩は、信号が存在する理由だけではなく、（ ）
たかったのだと有人は考えている。 （ ）ということを言い

問3 傍線部③「でも、頑張ったな」とありますが、叔父は何を頑張ったと言っているのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 有人が本心を隠して人前で明るくふるまえたこと。
- イ 有人がぎこちないながらも他人と話げできたこと。
- ウ 有人が同級生につきまとわれても我慢がまんしたこと。
- エ 有人が早退せずになんとか一日を過ごしたこと。
- オ 有人が先輩とトラブルを起こさずやりすごしたこと。

問4 傍線部④「――全然。さ、午後も張り切って行こーか」とありますが、これは誰の発言ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 有人 イ ハル先輩 ウ 誠 エ 涼先輩 オ 叔父

問5 傍線部⑤「もう一度疲れてみたい」と有人が思うのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 誠が四六時中そばにいて学校から帰るチャンスがないので、これからは帰宅後診療所を手伝わなくてすむことに気づかされたから。

イ 誠があれこれと付きまといちよつとした言い争いになったことで、かえって学校で隠していた本音を出せるようになったから。

ウ 誠が自分のそばを離れずに世話を焼いてくれたことがうれしく、ようやく登校できた学校にすんなり溶け込むことができたから。

エ 誠といっしょに授業を受けたことによってかつて目標に向かってがんばっていた頃の自分を思い出し、学ぶ喜びがよみがえってきたから。

オ 誠が明るく接してくれたおかげでいつの間にか誠のペースに引き込まれ、思いがけず学校での一日を心地よく過ごすことができたから。

問6 二重傍線部A「当たり前障りのない」B「ひょうひょうとしていた」の本文中での意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

A 「当たり前障りのない」

ア とくに欠点のない

イ どうしようもない

ウ 印象に残りやすい

エ 苦勞を感じさせない

オ 好感の持てる

B 「ひょうひょうとしていた」

ア 不満そうにしていた

イ 気にとめずにいた

ウ ふらふらしていた

エ 無視していた

オ 口をきかずにいた

問7 傍線部⑥「負担／家事／先生／ほしい／減らし／を／て／の／の」を意味が通じるように、正しい順序に並び替^なえなさい。

問8

I

IV

に当てはまる語句の組み合わせとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア I さらに

II やつぱり

III わざわざ

IV はるばる

イ I はるばる

II やつぱり

III さらに

IV わざわざ

ウ I やつぱり

II さらに

III わざわざ

IV はるばる

エ I わざわざ

II さらに

III やつぱり

IV はるばる

オ I はるばる

II わざわざ

III やつぱり

IV さらに

問9 傍線部⑦「柏木が帰っていった週末」とありますが、柏木についての説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 柏木はハル先輩の病気に関する研究を行っており、ハル先輩が倒れた時に薬を処方したことがあった。

イ 柏木は特に優秀な医師でもなく身なりにも気をつかわない人物だが、仕事に対しては誠実である。

ウ 柏木は島にいる時は叔父の業務後に二人で話をするため、叔父と有人の夕食はいつもより遅くなった。

エ 柏木は島を離れるまで有人と親しく話し込むことはなく、有人は柏木に特に何も思うことはなかった。

オ 柏木は離島で医療に従事する叔父のことを尊敬しており、神様みたいな存在だと思っている。

問10 傍線部⑧「ここはERと似ている」とありますが、どういう点でERと似ていると叔父は考えていますか。それを説明した次の文の（ ）に当てはまる語句を、文中から五字以上十字以内で抜き出して答えなさい。

島の診療所でもERでも（ ）をするために日々勉強をする必要がある点。

問11 傍線部⑨「有人はスマホを布団の上に投げて、爪をかんだ」とありますが、「有人」はこの時どのように感じていますか。その理由が分かるように六十字以内で説明しなさい。

問12 本文について説明した次の文のうち正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ハル先輩から定型文のような挨拶をされた有人は、ハル先輩が堅苦かたくるしい性格の人だと気付き、先輩と会話をする時は礼儀正しく接しようとしている。

イ 有人は学校に行けなかった日々を叔父に軽く扱われたようで不快に思っているが、叔父は有人が一学年遅れていることをたいした問題ではないと考えている。

ウ 転地療法を目的に離島の高校に進学したハル先輩は、柏木の研究に協力しながらできるだけだけ持病の克服こくふくに努めたことで、以前より病状が回復している。

エ 医師として島民から高い信頼しんたいと称賛を手に行っている叔父は、立派な医師を目指していた有人に居心地の悪さを感じさせまいとあえて明るく振舞ふるまっている。

オ 患者さんやその家族から恨まれている叔父の一面を知った有人は、自分が未来を奪ってしまった道下から恨まれているに違いないと強く確信している。

③ 次の傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- ① 言葉の意味をコウギに解釈する。
- ② ジュンドの高い金を買う。
- ③ 被告人のベンメイに耳を傾ける。
- ④ バンゼンの準備を整える。
- ⑤ 道徳に反した行為をハクガン視する。
- ⑥ 首相によるソカクが報道された。
- ⑦ ヤガイの施設でキャンプする。
- ⑧ 駅のケンバイ機で切符を買う。
- ⑨ 彼とはシュウセイの友だ。
- ⑩ うっかりして免許をシッコウした。



2024A1

↓ここにシールを貼ってください↓



国語 解答用紙

受験番号								
名前								

問 2 問 1 二 問 9 問 8 問 7 問 5 問 3 問 2 問 1 一

ということを言いたかったのだと有人は考えている。

ハル先輩は、信号が存在する理由だけではなく、

に人生をかけることにしたということ。

問 4
 A
 B
 C

から。

をするために日々勉強をする必要がある点。

島 問 9
 A
 B
 問 4
 問 5